

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

アラビアンナイト：ファンタジーの源流を探る

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2013-02-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西尾, 哲夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4799

アラジンと魔法のランプ 原典はどこに？

中国の少年

アラビアンナイト中でも、もっとも有名な作品の一つ「アラジンと魔法のランプ」の書き出しは次のようになっていきます。

名前はちよつと思いだせないのですが、中国のなかでもとりわけ広くて豊かなある王国の都に、ムスタファアという名の仕立屋が暮らしていました……息子のアラジンは放任されて育ちましたので、よくない習慣に染まってしまったのです。

このなまけ者の不良少年アラジンのもとに、亡くなった父親の兄弟だという魔法使いが訪ねてきました。叔父だというのは真っ赤なうそで、アフリカの魔法使いだったのです。ガラ

ンのフランス語原文には「アフリカの魔法使い」と明記してあります。ここでアフリカという言葉が意味しているのは、マグリブ、つまりエジプトの西に広がる地域、現在の国名で言うならばチュニジアやモロッコのあたりです。

マグリブとはアラビア語で「日が沈む場所」、転じて西方を意味しています。古代エジプト以来、ナイルの西側つまり日が沈む場所は死者の地と考えられていましたし、アラブ人のあいだではマグリブに暮らすベルベル人は魔術に長けていると思われていました。また、バグダード滅亡後にイスラーム世界の文化的中心地となったカイロから見れば、マグリブの地は辺境地帯つまり何か不思議なできごとが起こる場所でもありました。マグリブが魔法使いの故郷であるというのは、お約束事のようなものだったのです。アラビアンナイトには、アラジン以外にもマグリブの魔法使いが出てくる話がたくさん入っています。

マグリブという不思議に満ちた異郷を出発した魔法使いは、もう一つの異郷、イスラーム世界から見ればはるか彼方の文明国である中国へとやってきました。アラビアンナイトには、アラジン以外にも中国が舞台となっているお話がたくさんあり、ガラン版に収録されている「せむしの話」は中国が舞台ですし、やはりガラン版に入っている「カマルウツザマーンとブドゥールの物語」に登場する絶世の美女ブドゥール姫は中国の島の王女という設定です。イスラーム世界にとっての中国とは、不思議な話、幻想的な物語が生起する文学的トポス(場)でした。明治以後の日本ではこれと反対の状況が生じ、中東こそがファンタジーの本

場と考えられることが多くなりました。中東に対する日本人の視点については、後の回で確認してみましよう。

さて、マグリブの魔法使いは、土占いによってランプが中国の土の下に埋まっていることを知ります。土占いというのも聞きなれない言葉ですが、中世のイスラーム社会ではごく普通に行われていました。土占いは英語でジオマンシーです。この言葉には風水という意味もあるのですが、中国の風水とはまったく別のものです。簡単に言うと土占いとは、一握りの土や砂を地面に投げ、そこに出現したパターンを読み解くものです。アラブの人々は、土占いの本場はマグリブだと思っていました。マグリブは「西の果ての不思議世界」だったので。

さて、地下に置き去りにされたアラジンが魔法使いからもらった指輪をこすると、指輪の精が出てきます。ランプからジンが出てくるのはアラジンの話だけですが、指輪をつかってジンをあやつる話は他にもあります。また、アラビアンナイトの古層に属すると思われる「漁師の物語」には、旧約聖書のソロモン王によって金属製の瓶に封じこめられたジンが登場しますし、コーランにもソロモン王がジンをあやつる場面が描写されています。ジンはアラブのフォークロアを代表する存在と言えるでしょう。

つまりアラジンの物語は、西の果ての不思議世界から出てきた魔法使いが、アラブ世界で巻き起こした不思議話を、中国という東の果ての不思議世界に仮託してアラブ世界で育ったディヤーブが語り、それをヨーロッパ人であるガランが書き記したものであるということになりま



最初期に描かれたアラジンの中の魔人。
【千一夜】(1714、オランダ・ハーグ)より

す。アラジンの物語が欧米の読者に受け入れられた背景には、このような文化的多重構造があったのでしよう。ランプの精に助けられはしますが、なまけ者の不良少年だったアラジンは、まじめに商売にとりくむようになり、人間としても成長していきます。このような少年の精神的な成長物語は、宿命がすべてをとりしきるアラビアンナイトの中ではかなり珍しい例なのです。

マロン派教徒ハンナ・ディヤープ

さて、アラジンの物語を
ガランに語った人物ハン
ナ・ディヤープについて確
認しておきましょう。この
人はマロン派の信者だった
とされています。マロン派
というのは、東方カトリッ
ク教会に属し、レバノンに
多くの信者がいます。名前
からもわかるように東方カ

トリック教会はローマ・カトリック教会との関係が深く、ローマ・カトリックの教義にしたがっています。ガランがフランスの外交使節団に加わったのは、フランス国内の典礼問題に關して東方カトリック教会に接觸する必要があったためでした。フランスは歴史的にオスマン帝国との関係が深く、フランソワ一世（在位一五一五～四七）の時代にはオスマン帝国のスレイマーン一世（在位一五二〇～六六）と同盟を結び、オスマン帝国領内におけるフランスの商業特権を獲得しています。

ディヤープについてはほとんど何も知られていませんが、ガランの日記などの資料によれば、彼はアレップ出身のマロン派教徒でした。ガランと出あったのはフランス人旅行家ポール・リュカの自宅です。ディヤープはリュカに同行してフランスを訪れ、彼の自宅に滞在していたのでした。

一七〇九年三月二十五日付のガランの日記には「（ディヤープが）いくつかのたいそうよくできたアラブの話を聞かせてくれた」と記してあります。五月五日付の日記には、ディヤープからアラジンの原稿を受け取ったと書いてあります。これ以後、ディヤープはガランに「黒檀の馬」、「アフメッド王子と妖精パリ・バヌーの物語」、「アリババと四十人の盜賊」などの物語を次々と伝えていきました。このときにガランがディヤープから聞いた話のほぼすべては、ガラン版アラビアンナイトの第九巻から最終巻の第十二巻に収録されています。ディヤープは同年十月にマルセイユに到着し、故郷へと戻っていったようです。

アラビアンナイトの研究者は、ガランがディヤープから聞いた話を「孤児の物語」と総称しています。つまり親となる原典写本が確認できないのです。「黒檀の馬」のみはエジプトで編集されたブーラーク版に入っているので元になったアラビア語の写本があったと思われるますが、ブーラーク版に使われた写本は十七ないし十八世紀に作られたものでした。「孤児の物語」ではないものの、ガラン写本には入っていなかったのにガラン版アラビアンナイトとして世に出てしまった物語もあります。先にも少しふれたように、ガラン版第八巻には別人が訳した物語が入っていました。これを訳したのはペティ・ド・ラ・クロワという東洋学者でした。彼が訳した物語は『千一日物語』（二七二〇〜二二）という物語集となって出版されました。

ガラン版の続き？——カゾットとシャヴィ

さて、ガラン版アラビアンナイトの出版事情が複雑に入り組んでいることがわかりました。そもそもガラン本人が、作品の身元隠しをやっていきます。ガラン版アラビアンナイトには、夜が更けてくると妹のディナールザードが「お姉さま、お休みでないのならお話を聞かせてください」と頼む場面が入っているのですが、ガラン版アラビアンナイトの第三巻は別写本から訳したシンドバッド航海記でしたから、このような一節は入っていませんでした。そこでガランは、「夜が明けるたびに同じ会話をくりかえすのは冗長だから、今後はこれを省く」

という意味のことを第三巻の冒頭に書いています。そしてそれと同時に、シンドバッド航海記の写本には入っていなかった夜の区切りを入れてしまったのです。

ところが手持ちのガラン写本に載っていた話がつきてしまう寸前の第七巻では、「今後は夜の区切りすべてを省く」とことわっています。つまりガラン版アラビアンナイトの第七巻以降は、「第何夜」という区切りがなくなり、一つの物語が中断なしに最後まで語られることになるわけです。

このようにガラン版アラビアンナイトは、千一夜分の夜話が入っていた写本を途中まで訳したものであるという体裁になっていました。どこかに完全な写本があるはずだと信じて写本を探した人もいれば、アラブ世界に伝わっていた話をかき集めて新しく写本を作ってしまった人もいました。ともあれ商業的には大成功をおさめたわけですから、これを利用した人も出てきます。

そのなかでもよく知られているのは、『続千一夜物語』の作者カゾットとシャヴィでしょう。これはガラン版アラビアンナイトの続きと称していますが、実のところはシャヴィが捏造したアラビア語写本をフランス語にしたものです。ただし、シャヴィの写本をそのまま訳したわけではなく、カゾットによる創作物語も含まれています。

カゾットは『恋する悪魔』という幻想文学の作者として知られていますが、シャヴィについてはあまりよくわかっていません。シャヴィはディヤーブと同じくレバノンの出身でした。

フランス革命前夜にフランスに渡り、アラビア語の教師などをして暮らしていたようです。

シャヴィイは最初、ガラン写本の続きを作るつもりでした。シャヴィイが捏造した偽写本は後にシャヴィイ写本と呼ばれることになりました。シャヴィイはガラン写本の内容を少し変えて写したり、ディヤールブがガランに伝えたものの、ガラン版アラビアンナイトには収録されなかった物語を利用したりして、ガラン写本の続きに見えるようなアラビア語の写本を作っていました。アラジンについてはどこにも原典写本がありませんでしたから、ガラン版アラビアンナイトのフランス語をアラビア語に訳しなおしたのです。

シャヴィイ写本のアラジンは、全体的にぎごちないアラビア語で書かれています。文法的に間違っている箇所もありますし、いかにも直訳調といった無理なアラビア語表現が使われている箇所もあります。

どこから見ても本物——サッバークが写したバグダード写本

こうしてシャヴィイによる偽写本ができあがったわけですが、当時は誰もこれを疑いませんでした。それどころかこちらのほうがガランの翻訳よりも洗練されており、東方の人情風俗をより正確に伝えていると考える人もいたのです。『続千一夜物語』は英語にも訳されて広く読まれ、多くの読者を獲得したのでした。この物語集はシャヴィイ写本の翻訳ということになっていましたがカゾットの創作がまぎれこんでいたため、一八〇六年には東洋学者のド・

パルシヴァル（一七五九〜一八三五）が、王立図書館に寄贈されていたシャヴィ写本をわざわざ再訳しています。このころになると、ヨーロッパの東洋学者たちは、ガラン版アラビアンナイトには入っていないなかった話が記されたアラビア語写本を競うようにして探し求めました。写本クエスト（探索）の背景にはナシヨナリズムの影もちらついているのですが、そのあたりの事情は後の回で確認してみましよう。

さてシャヴィ写本の次に登場するのが、真打とも呼べるサツバーク写本です。サツバークもディヤープやシャヴィと同様、レバント（地中海東部沿岸）地方の出身でした。先日、アブダビで開催されたアラビアンナイト関係の国際会議でサツバークの子孫にあたる参加者に会いました。世界的に有名な番組プロデューサーだそうです。先祖がとんでもないことをしてしまつて……」と冗談まじりに話していました。彼のご先祖はいったい何をやったのでしょうか？

ミシエル・サツバークはナポレオンのエジプト遠征（一七九八〜一八〇一）の折にフランスに渡りました。フランス大革命（一七八九〜九九）では、多くの東洋学者が処刑されたり国外に逃れたりしましたので、アラビア語学をはじめとする東洋学の人材が底をついていました。エジプト遠征のさいにも、アラビア語でカイロ市民に布告を出したのですがこの布告が間違いだらけだったので、アラブ知識人の失笑をさそつたほどです。

サツバークはアラブ世界で高等教育を受け、アラビア語学やアラブ文学に通じていました。

パリに渡ったサッバークは、先ほど名前が出てきた東洋学者ド・パルシヴァルの依頼を請け、バグダードに伝わっていたというアラビアンナイト写本を筆写することになりました。サッバークによればこのバグダード写本は千一の夜に区切られており、千一夜目に大団円を迎えています。これこそアラビアンナイト誕生の地イラクに伝世していた完全なアラビアンナイト写本に違いありません。しかもそこには筆写した人物名だけでなく、筆写した日付が明記してありました。ヒジュラ暦一一一五年ジュマード・アルアーヒラ月十日、西暦になおすと一七〇三年十月二十一日です。

この日付には深い意味があります。ガラン版アラビアンナイト第一巻は一七〇四年の出版ですから、バグダード写本はガラン版が世に出る前に作られたものだったのです。しかもディヤープがガランにアラジンの物語を聞かせたのは一七〇九年ですから、ディヤープはバグダード写本を通してアラジンを知っていた可能性が出てきました。

バグダード写本を写したというサッバーク写本には、シンドバッド航海記とアリババは入っていないのですがアラジンはあり、アラジンがディヤープもしくはガランの創作ではないかという疑いはとりあえず消えたわけです。ところが父親のあとを継いで東洋学者になったド・パルシヴァルの息子が一八七一年に死去したさいの蔵書目録にはこの写本は記載されておらず、オリジナルのバグダード写本はどこからも見つかっていません。

サツバーク写本の正体

一八八七年、とある古書籍商からパリ国立図書館にいくつかのアラビア語写本が持ちこまれました。そこには長いあいだ探し求められていたアラジンの物語が記されていたのです。これを詳細に調べた東洋書庫担当の司書エルマン・ゾータンベールは、これこそまちがいに本物のアラジン原典であると確信し、アラジンの校訂本を出版しています。ゾータンベールが本物と断定した写本こそ、幻のバグダード写本を写したというサツバーク写本でした。中東の古写本に通じていたゾータンベールが太鼓判を押したサツバーク写本は一世紀近くも世間を欺き、アラジンの身元も確認されたということになりました。

しかしながらこの写本はガラン写本、シャヴィイ写本、そしてガランの時代から知られていたマイエ写本を寄せ集め、サツバークの文才を駆使してリライトしたものであったことが明らかになったのです。サツバークが偽写本を作ったことを見抜いたのは、アラビアンナイト研究の第一人者ムフシン・マフディーでした。アラビア語のネイティブスピーカーであるというだけではなく、きちんとしたアラビア語学を身につけていたサツバークは、文句のつけようがない「偽写本」を作ることができたのです。

サツバークの手になるアラジンは、部分的な書き換えや加筆を除くとガラン版とほぼ同じです。サツバーク写本は当然ながらアラビア語ですが、これを英語に訳したものがバートン

18世紀のオスマン帝国



版のアラジンです。バートンは、ゾータンベールがサッバーク写本を写したものを渡してくれたので、それを訳したと注に記しています。ガラン版のアラジンもバートン版のアラジンも日本語で読むことができますから、興味のある方は読み比べてみると面白いでしょう。